

ストーリー化された歴史観光素材の功罪をめぐって

～「幕末会津」をめぐると言説を中心に～

A Study on Narrated Historical Tourism Content
In Case of the Historical Aspect of Aizu

須賀 忠芳

Tadayoshi SUGA

1. 問題の所在

歴史を観光対象として捉えた時、D. マキャーネルが「観光対象という媒介を通してみる過去の様相は、過去の延長としてではなく、過去の置換として見せられる現在の側から位置づけられる」と述べるように（マキャーネル、2012）、文化観光・歴史観光は、地域における文化的・歴史的文脈を追い求め、そこでしか体感できない見聞を得ることを観光者は要求し、その知識欲を充足するものとなるが、一方で、そこで感得された感慨とは、正に、現在の立ち位置から見た「置換」された過去にすぎないのであり、過去の現場そのものとはなりえない。歴史観光は、常に、現在の状況から「置換」され、再編された歴史の場に立つことを余儀なくされるわけで、そうした過程で、過去の状況は「ストーリー」化され、同時にストーリーと化した地域の場所、言説を訪ねることにおいて、文化観光・歴史観光は成り立つものと位置付けることもできる。

事実、『おくの細道』の故地を訪ねる旅は、「（現代でも高い評価を受けている）松尾芭蕉が訪れた」という一点において、その旅の目的は達せられる。栃木県大田原市黒羽で、いまや田地でしかない鹿子畑翠桃邸跡も、あるいは、秋田県にかほ市象潟で、海岸地域の隆起にともなってその風光明媚な景観は失われたとしても、芭蕉が、当該紀行中最も長い14日間逗留した黒羽で、鹿子畑翠桃邸が、当行脚中の最初の歌仙興行が行なわれた場所であることや、象潟について、松島と並んで目的地の主要な場所として設定し「松島は笑ふがごとく、象潟は憾（うら）むがごとし」として、芭蕉が象潟を印象的な一文で評していることが、観光者に、当時の芭蕉の感慨を感じ取らせるものとなるのであり、そこにおいて、観光者は、その目的を達することとなる。同時に、芭蕉も、奥州を旅することの目的に、同時代人から評価の高い先達としての能因法師や西行の道中を念頭に置き、その故地を訪ねることを目的としていることも考えあわせれば、芭蕉自身、当該地域における一種のストーリーを追いかける形で旅を続けていたと捉えることもできる。2014年3月に、大田原市の八幡宮（那須神社境内）や、にかほ市の象潟及び汐越などを含む『おくの細道』ゆかりの地、10県13ヵ所は、「おくの細道の風景地」として国の名勝に指定されたが、その選定理由には、「相互の繋がりのあるものとして評価すべき一体の風致景観」「（『おくの細道』を通して）往時を偲ぶよすがとなる優れた風景」であることが挙げられている¹。このことは、芭蕉が訪れ、『おくの細道』に描か

れた場所としての、正にストーリーを有した一帯の景観群としてのあり方が評価されたこととなる。また、新井敦史は、現在の大田原市とその周辺地を描いた江戸時代後期の案内絵図に、芭蕉の訪れた場所や詠んだ句が掲載されている事柄を取り上げながら、「(当地を領した) 那須家関係の史跡は、芭蕉が訪れたことにより、(中略)『おくの細道』の名文とともに、芭蕉の足跡も刻印された新たな伝説の地へと生まれ変わった」と評している(新井、2012)。『おくの細道』に関連付けながら、作中において句に詠まれた場所のみならず、芭蕉の行程そのものが「新たな伝説の地」とされるときにも、そのストーリーが形成され、人々の観光誘因が促されることとなるのである。

ストーリーをもとに、観光者を地域に呼び込もうとする方策は政策レベルでも進められている。経済産業省は、2014年10月に、「地域ストーリー作り研究会」を開催し、翌年2月には、当該研究会の報告書を提示した。当会合の目的ともなる「地域ストーリー」創造の目的について、同研究会資料によれば、「個々の地域資源を組み合わせ、その関連性や文脈を興味深い物語に仕立て上げることにより、地域全体の魅力やブランド力を高め、地域を訪れる人々の関心や注目を集めること」にあるとされている²。「地域ストーリー」の創出とは、観光者のニーズに合わせて、「(地域資源の) 関連性や文脈を興味深い物語に仕立て上げる」(同前、傍点、引用者) こととなるわけである。また、2015年4月に、文化庁を主体として初めて指定がなされた日本遺産も、「我が国の文化・伝統を語るストーリー」を日本遺産として認定し、「国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図る」ことを目的とするものであり³、地域における歴史素材をストーリー化して、観光者らの面前に提示し、それらを認知させることで、地域おこしに活用しようとするものである。こうして、地域における歴史素材をストーリーとして、現代の立ち位置から「置換」し、再編して提示することは、そもそも、現代の感覚でしか事物を捉え得ない観光者に対して観光対象を咀嚼して提示し、来訪意欲を鋭く刺激することとなろうことは想定できる。しかしながら、地域の歴史事実が、ストーリー化のもとに安易に再編される時、当該地域における歴史観、地域観には大きな影響を与えることともなるであろうし、また、それが、必ずしも、永続的に観光者を呼び込むこととも成り得ないであろうことも考え合わせる必要がある⁴。

本稿では、そうした問題意識を背景に、現在の福島県会津若松市を中心とした地域における「幕末会津」の言説が、いかに一種のストーリーとして創出され、その受容の経過において、地域における歴史認識、及び観光行動にどのように影響したかを考察し、地域の歴史観光素材が、ストーリー化され、「再編」されていく中での意義と課題について明らかにするものである⁵。

2. 「幕末会津」における歴史的位相とその表象

「幕末会津」における歴史状況は、江戸幕府における「御三家」につぐ「御家門」として位置づけられるとともに、3代将軍家光の異母弟で、藩祖・保科正之が残す、「(大君に) 若し二心を懐かば、すなわち、我が子孫にあらず 面々決して従うべからず」として幕府に絶対の忠誠を誓った「家訓」を藩とした会津藩 23万石の成り立ちにおいて既定されたということが出来る。時の藩主松平容保は、幕末京都において、尊王攘夷を言う「志士」らによって混乱を極めていた京都市中に新設された京都守護職に就くこととなるが、家老職らの諫止を抑えて当職に就くこととなる容保の決意の

背景には、幕府側の強い要請とともに、藩祖・保科正之の家訓があったとされる。容保が京都守護職に任ぜられたこの時をもって「会津藩の悲劇的な運命は決せられたといつてよい」（豊田ら、1972）とされるのである。その後、武力倒幕の貫徹を目指す薩長勢力の旧幕府方への挑発に誘導される形で起こった戊辰戦争において、江戸城無血開城に伴う幕府側の倒幕派への全面降伏に至る中、会津藩も恭順の意向を示すものの、薩長勢力が会津攻めを強行し、これに反発した東北・越後の諸藩 20 藩余りが「奥羽越列藩同盟」を組織しこれに対抗、その後、薩長勢力のいわゆる「官軍」が、列藩同盟の中核であった「賊軍」としての会津藩を攻め滅ぼすこととなるのがいわゆる会津戦争である。会津戦争は、家老・西郷頼母邸における頼母の母、妻子ら 21 人の自刃など、その悲劇的な様相がよく知られ、中でも、その象徴的存在とされるのが、16 歳から 17 歳までの少年たちで編成された「白虎隊」である。とりわけ、士中一番隊から足軽二番隊まで約 300 名で構成された部隊の一部である士中二番隊の 20 名が城を面前にした飯盛山で自刃し、1 名の蘇生者を除く 19 名が息絶えたとする事実は、会津戦争の記憶を後世に強く伝えるものともなったといえる。白虎隊に心酔し、遺言によりその遺骨が飯盛山に埋葬されたりヒャルト＝ハイゼは、1940 年代に白虎隊について、次のように触れている。

自殺した少年達は日本国民の胸中に不滅の名誉ある追憶となつて残っている。名声を博することとは彼等の想像、意図又は希望外のものであったが、彼等は充分それに値した。（中略）単に親族、郷党及び日本国民に止まらず、外国に於ても多数の人が此等少年の勇敢な行動と忠義とに対し尊敬を払っているのである。斯して白虎隊は万古不易の名声を輝かしている。彼等のさ、やかな墓地は霊地と化し、人々は茲に詣でて荘厳な黙禱に時間を過すのである（ハイゼ、1941、旧漢字は引用者が改稿、下線部は引用者による）。

一方で、本来は、いわゆる「賊軍」の一部隊の壊滅にしかすぎず、会津戦争当時は、その遺体の埋葬も許されなかった白虎隊の自刃が、広く一般に知られ「不滅の名誉ある追憶」として記憶されるに至る背景には、その行動が、「白虎隊精神」として国策の形で称揚されていくことにあった。後藤康二は、小学校国定歴史教科書の変遷について取り上げ、第 2 期（1909 年）までは取り上げられない白虎隊が、第 3 期（1921 年）以降登場、第 5 期（1941 年）では「彰義隊」などと並んで本文上部欄外のキーワードに示され、まるで「会津戦争は白虎隊の戦いに代表されるがごとき」で、「会津藩の官軍への頑迷な抵抗あるいは徹底抗戦を描く本文よりも、そこに挿入された白虎隊の少年達の『壮烈な最期』というエピソードの方にかえて力点が移っている」こと、第 6 期（1943 年）では、さらに白虎隊の飯盛山での集団自刃の場面が挿入されていることを指摘している（後藤、2002）。

1930 年代以降、総動員態勢が進められていく中で、会津戦争全体の一部の出来事にすぎない白虎隊の悲劇が強調されていく政策意図は明瞭である。会津戦争における白虎隊の、主君であり、藩に対するその「純粹さ」が広く喧伝され、それは、正に「生きた教材」として教育実践の場にも供されたわけである。会津藩の降伏期日は、「官軍」における祝うべき日であって、この日には、その後、靖国神社の秋の例大祭が開催される。白虎隊を称揚することは、「賊軍」として自刃する白虎隊と、靖国神社に祀られる「祭神」とを同一視する大いなる矛盾を超越し、会津戦争のあり方そ

のもの、また白虎隊の存在価値が、急激に高められていく経過を示すことにほかならない。こうした状況について、会津地域の人々は、先人の受けた屈辱を考えれば、その手前勝手な方向転換とも言える国家の側の歴史認識の変化に対して拒絶することも選択肢の一つであったであろうが、実際には、それを否定するどころか、むしろそうした動向を誘導しつつ、積極的に受容していることがわかる。1937（昭和12）年5月、徳富蘇峰が会津若松で講演し、この時、蘇峰が「誠忠無二の会津藩を逆賊などとは言語道断」「従来の維新の歴史は考え方が間違っているから、これは正しく書き直さなければならない」と述べると2000有余の聴衆は深く感じ入ったという（早川、1976）。その後、後に白虎隊記念館を創設する早川喜代次らが在京会津会の有志30余名が「会津藩勤皇精神顕彰会」を結成、小学校国定教科書の全面改訂を要求している（早川、同前）。こうした動きが、先に取り上げた教科書記述の変化に影響を与えたとも言えるだろう。また、1943年には、前述した、会津戦争で一族子女21名が自刃した西郷頼母邸跡に建碑がなされている。田中悟が、『会津』という共同体は、会津在住者・出身者を丸ごと巻き込んで、日本国民（ネイション）の周縁的地位を脱した勢いそのままに、ついにその中心にまで躍り出た」と表現するように（田中、2010）、「賊軍」の汚名を冠せられてスタートした近代における会津の状況は大きく変転し、勇躍、稀代の理想的な藩として政策的に祭り上げられ、前代の敗戦におけるその屈辱的な記憶や恐怖とが薄れ去る中、前代の屈折した思いは大きな変化を遂げていくこととなる。いわば、白虎隊を代表に「尽忠報国」の理想形としての会津藩とその人々が当時の国民の一つのあるべき姿として称揚され、「幕末会津」における人々の苦闘なり、複雑な歴史状況を捨象して、「現代」の視点からの一つの「歴史ストーリー」が国を挙げて構築され、地域がそれを積極的に受容したこととなるのである。同時にそうした歴史ストーリーは、地域観光素材として注目され、戦前、戦後を通じて、多くの観光者を招き寄せることとなるのである。

「幕末会津」のストーリーは、メディアの影響を受けながら、折に触れて、浮上し、コンテンツとして注目を浴びることとなり、近年では、2013年に放映された、NHK大河ドラマ「八重の桜」が放映され、会津へのまなざしが高まった。その背景には、2011年の東日本大震災の復興を意識したものがあつた。次節では、大河ドラマ「八重の桜」をめぐる功罪について、触れることとする。

3. 大河ドラマ「八重の桜」のもたらしたもの

2013年1月から12月にかけて、NHK大河ドラマ「八重の桜」が放映され、山本（新島）八重とその兄覚馬を主軸としながら、幕末会津の状況が活写され、幕末維新期における会津の立ち位置が一般において注目されることとなった。当番組は、平均視聴率こそ、14.6%とふるわなかったものの⁶、番組放映に際して建てられた「ハンサムウーマン八重と会津博 大河ドラマ館」の入場者数が60万人を超え、その福島県内への経済波及効果は111億円と試算（木村、2014）されるなど、当番組は、その高い注目度から、地域の観光にも大きく寄与するものとなった。後述する会津若松市観光入込者数でも、2013年の市内年間観光者数は395万余人で、前年よりも100万人（対前年比133.8%）の増加となり、市当局も「東日本大震災前と比較しても、大幅な増」となったことを記している⁷。また「八重の桜」を主題とし、2013年3月に、会津若松城（鶴ヶ城）で行われたブ

ロジェクションマッピングには、2日間の開催で1万6千人が集まって好評を博し（木村、2014）、当該企画は、以後、2015年まで毎年実施された。NHK大河ドラマがいわゆる「大河ドラマ効果」として地域観光のカンフル剤となることはよく知られているが⁸、東日本大震災及びその風評被害に伴う観光者数の急激な減少に対応するものであったことを勘案しても、その観光者数の急伸には顕著なものがあり、「大河ドラマ効果」が当地における観光産業に与えた影響は圧倒的なものがあったといえる。一方で、当該ストーリーにおいて一貫して取り上げられた主題は、歴史的状況における政治動向や地域の実情を度外視した、「困難に立ち向かうひたむきな姿勢」であり、また、それを支える「地域の絆」であった⁹。

当番組の題材は、関係者からの聞き取りによれば、東日本大震災を受けて、急きょ差し替えられたといい、「震災地域における苦難に立ち向かった歴史上の人物」及び「女性」を主人公とする範疇から選出されたとされ¹⁰、地元でも、正に「知る人ぞ知る」存在であった山本八重と、また、その兄で、高い知見から明治維新の高官らにも影響を与えたとされる山本覚馬の存在感を圧倒的に高からしめたことには大いに意義があった。また、そのストーリー展開も、たとえば、幕末京都における政治・社会の動向がドラマ仕立てで描かれる時、往々にして、薩長主導でその立場が強調されたり、あるいはその実態を誇張しつつ新撰組や坂本龍馬の動向が劇的に描かれたりする傾向が強い中で、幕府の体面を保つために激動の矢面に立たされ、混迷する事態の収拾にあたる会津藩の立場が客観的に取り上げられるなど、一般視聴者に対する平板な幕末史観を一新させるものであったことは評価できる¹¹。加えて、1年間の放映期間の多くを幕末会津を主題として取り上げ¹²、その苦難な状況を強調しつつ、その後、そうした困難に立ち向かう会津の人々の動向としての山本八重なり山川浩なりの描写にも見るべきものはあり、とりわけ「震災」「原発被害」の二重の困難に直面する福島県、また震災地域全体に対する、大河ドラマを通じてのメッセージ性は読み取ることができた。

「八重の桜」について、NHKは、その番組紹介で下記のように記している。

国敗れてもその地で育まれた会津武士道で、生涯自分の可能性に挑み続け、すべての人の幸福を願った会津女・新島八重と、仲間たちの愛と希望の物語。「東北・福島に根付く不屈のプライド」で日本にエールを送る！！¹³

また、劇中、山本（新島）八重は、会津戦争に関連して以下のようなセリフを連発する。

「会津は負けねえ」「ならぬことはならぬのです」

番組全体の基調として、「生涯自分の可能性に挑み続け、すべての人の幸福を願った会津女」としての主人公の、逆境に立った「わが郷土」を守るために発揮される強い意志が随所に示され、そこに、震災にうちひしがれた「フクシマ」の人々の再生の姿を重ね合わせていくわけである¹⁴。

一方で、視点を変えれば、震災後の状況におけるものと、幕末の状況とでの「困難」は、その実体において大きく異なるものがあることには注意をはらう必要がある。前者は未曾有の災害として1000年に一度ともされる地震・津波の自然現象によるものであり、それを予測することより予防

することなりをめぐっては、およそ人智の及ぶところではなかったといえる。一方で後者は、結局のところは、為政者による政治判断の誤りが招き寄せることとなった事態であり、それを回避することは何らかの方法で可能であったはずだが、それができなかった政治的失策が招来するもので、そこに当地の武士と民衆らとが対峙せざるを得ない状況が生じた結果といえる。加えてまた、新政府軍¹⁵が勝ちに乗ずる形で、当地における略奪行為を含めた乱暴狼藉を働く様相もよく知られているが、そうした行為を抑止する組織内の規律が保たれていれば、会津戦争の悲惨な様相も異なった局面を見せていたに違いない。しかし、「八重の桜」番組中では、そこに至った、藩主をはじめとした会津藩の指導者層の判断の誤りが追及されることはなかったし、また、そうした指導者層がいわば招き寄せる結果となった悲惨な戦争に巻き込まれたともいえる領民の姿も、ほとんど描かれることはなかった。悲劇の主体としての会津藩の動向は描かれながらも、そうした悲劇を招くこととなった会津藩の政策的失敗や、それに付け込む新政府軍の傍若無人な対応、なおかつ、そうした状況に図らずも組み込まれ、多くの犠牲を出した本当の悲劇の主体としての民衆の姿は描き出されることはなかったといえる。また、そうした悲劇における白虎隊を主体とした「語り」が、戦時体制における思想教化としての「道具」に用いられ、アジア太平洋戦争における民衆動員を誘因することとなることにも、一切、触れられることはない。

幕藩体制を支えてきたともいえる、幕府を頂点とした封建的思考観念は、幕末において、弛緩しきった状況にあり、それが混乱した政治情勢を生起させていくこととなるわけだが、そこにおいて、会津藩はその規律が保持されていた稀有な組織体であったということもできる。しかしながら、封建体制の模範ともいえるその保守的な頑迷さが、結果的に、破滅的な戦争を引き寄せ、その下において、多くの犠牲者を出すこととなることも考え合わせることは必要であるにちがいない¹⁶。会津戦争の「語り」の場では、そうした客観性は全く失われ、いわば全藩結束して破滅に向かったともいえるその悲劇性のみが強調され、こうした会津戦争の定型的なイメージ化は、震災復興をめぐる動向とあわせて、ドラマ上の演出とはいえ、大河ドラマ「八重の桜」によって、より強固なものとなったといえるだろう。

また、そうしたイメージ化は、会津戦争における、正に「悲劇の中核」ともいえる白虎隊、及び会津戦争全体への一種のストーリー化に連結することとなるのであり、その功罪についても、指摘することができる。

4. 会津若松にみる歴史素材ストーリー化の功罪

会津若松市の観光入込者数は、最盛期の400万人弱から、東日本大震災の影響による落ち込み、2013年度のNHK大河ドラマ「八重の桜」による増加とその揺り戻しなどの経過をたどりながら、2016年度は300万人弱の観光者が記録されているが、そのうち、鶴ヶ城天守閣の入込客数は、60万人弱で市全体の5分の1程度の観光者を集めている。また、会津若松市役所の統計による、「市内主要観光施設」も、53万人強の入込があるが、これらの施設も、会津武家屋敷や白虎隊記念館、飯盛山スロープコンベアなど、会津戦争に関連した施設展示であることも考えあわせれば、同市を訪れる観光者の半分程度は、「幕末会津」に関心を持つ者が来訪しているといえる。正に、いわゆ

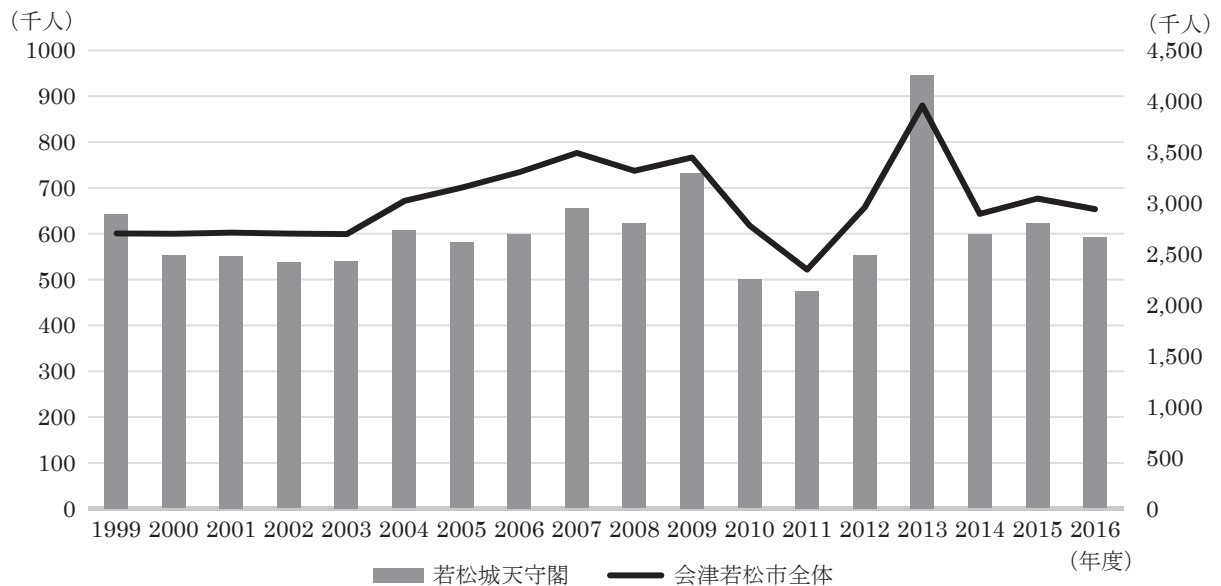


図1 会津若松市、若松城天守閣の観光入込者数推移（会津若松市資料をもとに、筆者作成）

る白虎隊の悲劇を中心とした「幕末会津」のストーリー化が多く観光者の関心と呼び、同地の観光を支えているとみることができる。一方で、約20年前の鶴ヶ城天守閣入込客数をみれば、1993年度は92万人強、94年度は85万人弱の入込者があり、「幕末会津」のストーリーは、NHK大河ドラマ等の「カンフル剤」が無ければ、その有効性が機能しづらくなっている状況もみてとれる。同時に、「幕末会津」のストーリー化は、次にあげるいくつかの点において、地域住民の歴史観、また同地を訪れる観光者の歴史観に、大きな影響を与えるものともなっていることがわかる。

まず、「白虎隊の悲劇」が可視的に強調されることで、その現実性がむしろ喪失されてしまうという点である。藩校日新館の流れを継承するものとし、有志による私学として1890年に設立され、その後、県立旧制中学校に移管されて現在に至る県立会津高校には、生徒会の各種委員会に剣舞委員会があり、白虎隊慰霊のための剣舞が伝えられている。剣舞は、4月と9月の飯盛山での白虎隊墓前祭において披露されるほか、京都への修学旅行中には、会津藩が本陣をおいた金戒光明寺でも奉納することが、近年の通例になっている。

学校行事において披露されることもあり、その際は、旧制中学校当時は、生徒全員で敬礼脱帽し、厳粛な態度で慰霊の意を表したとされる（会高剣舞会、1983）。ところが、この白虎隊剣舞は、現在では幼稚園の運動会の出し物にも取り入れられ、幼稚園児が切腹の動作を入れる演舞を舞うところもある¹⁷。会津高校生徒による墓前祭の剣舞奉納に際して、それを見逃した観光者の一部が、生徒に対し、再演を要求し、生徒達が憤慨した場面にも遭遇した。幼稚園児のお遊戯的感覚として、また、出し物として白虎隊剣舞を捉えるその態



写真1 福島県立会津高等学校剣舞委員会による飯盛山墓前祭剣舞奉納（筆者撮影）

度は、慰霊を目的とした奉納剣舞のその本来の意図を逸脱し、そのイベント性のみが認識されているにすぎない。同時に少年19人が一度に自殺するという悲劇の現実性は置き去りにされ、「会津戦争＝白虎隊」としての単純な図式の中にあてはめられていく中で、白虎隊は一つの偶像と化し、単純に「地域の誇るべき存在」にまつり上げられ、藩当局の失策により戦争が開始され、年少の彼らが戦場に動員されて命を落とすこととなる歴史上の客観的要因の遡及は手つかずのままに、その惨状の地と墓地とが単なる観光資源と化していることになるのである。

また、白虎隊に代表される一部の犠牲のみが強調されることで、戦争全体を客観視する態度が失われたということが挙げられる。軍医として当地に入り、戦争を目の当たりにしたイギリス人・ウィリスは、その状況を次のように述べた。

（若松城明渡し後）護衛隊の者をのぞけば、さきの領主である会津侯の出発を見送りに集まったものは十数名もいなかった。いたるところで人々は冷淡な無関心をよそおい、すぐそばの畠で働いている農夫たちでさえも、往年の誉れの高い会津侯が国を出ていくところを振り返って見ようとししないのである（ウィリス、1974）。

当時は、城下から落ちのびる武士達に対して、民衆は石をぶつけながら見送ったという話も伝えられているほか、会津戦争後、「ヤーヤー一揆」とよばれた、村役人ら指導者に対する農民一揆も発生している（田崎、1996 ほか）。会津戦争は、民衆の経済的負担と人的犠牲の上に成り立っており、人々は武士層に対する根強い不信感の下で戦争を捉えていたことがわかる。しかし、それらの事実が提示されることはほとんどなく、悲劇の下で藩を挙げて戦争にあたったとする幻想の下にかき消されがちなのであり、それを、観光者はもちろん、地域住民までも全く自覚することなく、単純化された「幕末会津」のストーリーを追っているのである¹⁸。

加えて、「幕末会津」のストーリー化は、後世の政権によって形作られていった側面が強いにも関わらず、その事実は、地域住民には容易には受容しがたいものとなっていることが挙げられる。地域のために命をかけて戦ったとする、「白虎隊」イメージは、先述した通り、戦前の政府によって、戦争完遂のために意識的に強調されていったわけだが、地域住民に強く根付いた白虎隊像は、そうした「歴史ストーリーの構築」を容易には受け入れるものとなっていない。事実、筆者が同地域における高校教員を務めていた時期に、日本史授業で「創出された白虎隊像」に関して取り上げる形で、1940年代の状況として前出のハイゼの文章等を提示すると、生徒らの反応の大半は、その時代状況を考慮することなく、単純に下記のように、白虎隊を誇らしく捉えるのみであり、また、彼らによって体现される、「会津魂」なるものを受け継ぐことを強く表明するのである（須賀、2006）。

1869年、戊辰戦争が起こり、それから70年余り経った後も、白虎隊の勇敢さが日本国民だけでなく、外国でも評価されたことは本当に誇りである。（中略）私は（「純忠の精神」としてのいわゆる白虎隊精神を学校運営の基本理念とした鶴城国民学校の後継である）鶴城小学校出身なので、今日、この話をきけて本当によかったと思っている。校歌の一番も白虎隊のことが歌われていたのを思いだし、歌詞の意味の重さのようなものも感じた。この70年間受け継がれ

てきた会津魂を絶やさず継いでいきたい。（文中注釈、下線部は筆者による）

また、やはり、同地区での白虎隊の戦時利用を授業で取り上げ、それに対する生徒の反応を分析した菅野剛の実践によれば、そうした教師側の提示に違和感・抵抗感を持った生徒は全体の7割弱に達したという。生徒の感想では、「勇者をけなされた嫌悪感がある」とするあからさまな拒否感を示す者や、菅野が同地区出身ではないことを取り上げて「（白虎隊を揶揄するのは）先生が会津生まれではないからではないか」として、他地区出身の教員によって、郷土を汚された、といった形で強い抵抗を示す者もあったという（菅野、2015）。主君に殉ずる「美德」が、あえて国家によって称揚され、その悲劇的な状況を取り上げることで「幕末会津」のストーリー化は完結することとなるわけだが、地域に根付いたそのイメージ像は、強く固着し、その客観的理解を求める者に対して、「よそ者の感覚」として抵抗感を持つまでに至っていくのである。

5. シビックプライドの醸成と歴史観光ストーリーのあいだ

当時の実相から遊離し、固定化した「会津戦争観」「白虎隊像」からなる「幕末会津」のストーリー化は、アジア太平洋戦争における「尽忠報国」としての国家総動員の施策の下でフレームアップされたものであったわけだが、それは、戦後に至っても、地域住民、及び観光者の意識、動向に大きく作用することとなった。また、今ではむしろ観光者側が称揚する、誇らしい白虎隊像なり会津魂なる、外からの「まなざし」が、地域住民の地域観をさらに高揚させるものとなっているともいえる。

地域活性化、地域マネジメントの観点から、観光まちづくりへの議論が盛んである。西村幸夫は、地域に内在する特性としての地域資源について、「他とは異なった独自性にこそ魅力があるのであり、たんなる消費財として一般化できるものではない」とし、地域資源の活用を通して「経済の活性化に繋げるもっとも説得力に富んだ方策」を現在の観光のあり方に見出している（西村、2009）。その際、地域において、市民が都市生活に感じる誇りや愛着のことを示すとするシビックプライドは、その施策に大きく寄与することとなるであろうし、また、当該施策の展開は、その醸成にも強く影響していくことは間違いないであろう¹⁹。同時に、地域の歴史文化への理解は、シビックプライドを高めていくものとなるであろうことも推察できる。しかし、伊藤香織は、愛媛県今治市を事例に、地域参画、地域アイデンティティ、忠誠的愛郷心、地域愛着を尺度としたシビックプライドに関する調査で「地域アイデンティティは弱く、忠誠的愛郷心は抽出されなかった」と報告し、これを「日本の都市のシビックプライドの構成の一端を表している」と述べている（伊藤、2017）。また、西村奏美らによるシビックプライドに関わるアンケートでは、「市民の多くが認識しているのは『風土』への理解と『施策』への関心である反面、地域の『歴史』についての自覚が薄く、若い世代ほど顕著であった」とし、地域社会を中心となって担う30歳代の層では「自分たちの街に魅力と愛着を感じる度合いの少なさが浮き彫りになった」という（西村ら、2013）。これらが示唆するものは、若年層を中心に、地域文化、歴史への理解が乏しく、それが、地域アイデンティティとシビックプライド創出との断絶に関連していると見て取ることができる。

一方で、こうした状況は、会津若松を中心とした福島県会津地方においては、無縁のことかと思われる。「幕末会津」のストーリー化に基づく、「勇者」（前出生徒コメント）としての白虎隊像に代表される、確固たる歴史認識を保持し、それをもととした地域アイデンティティを背景に、強固なシビックプライドを地域住民が形成していると言えるからである。それをもって、外部の視点からの番組制作者が、「会津は負けねえ」「ならぬことはならぬのです」とするセリフをドラマの中で主人公に語らせることになるのであるし、住民レベルでのそうした地域への思いが、東日本大震災後の地域復興に大きく寄与したであろうことも想像に難くない²⁰。また、そうした地域住民の認識と、歴史ストーリーこそが、多くの観光者を招き寄せ、同時に、観光施策に基づく当該ストーリー定着が、地域住民の地域アイデンティティ、シビックプライドとを高からしめているともいえる。しかしながら、定番化された「幕末会津」をめぐるストーリーは、先述の通り、現在の観光状況においては、一般の支持を得がなくなっていることも事実であり、歴史事実を丁寧にくみ取ろうとする観光者に対しては、むしろ、その「構築された歴史像」そのものを提示することも、関心を高めるものともなりえる可能性もある。教育施策、文化施策として、地域住民に対して、客観的視野に立脚した地域の歴史像の考察を促し、稚拙な政治判断によって自らの命を投げ出さざるをえなかった白虎隊の苦衷と、当時の民衆の悲嘆に思いをはせるとともに²¹、当時、地域の人々を塗炭の苦しみに追い込んだ軍事組織の後継政権が、後に、命を投げ出した若者たちの忠節を、逆に政治的に「利用」することとなったことをこそ理解し、地域の置かれた歴史状況を深く認識する方向性を主導すべきだろう。また、客観的事実としての歴史過程を観光者に提示することは、一面的な理解ではない歴史認識の深淵に触れることへとつながり、それは安易に消費されえない、サステナブルな地域資源、文化資源を構築することとなるに違いない。

地域創生のかけ声の下、観光施策の切り札として析出される「地域ストーリー」「我が国の文化・伝統を語るストーリー」は、地域住民の合意を得ながら、いかに客観的立場で捉え直し、どのように観光者に提示していくべきかが、改めて問われているといえるのである。

[註]

- 1 文化庁国指定文化財等データベース「史跡名勝天然記念物 おくのほそ道の風景地」項。
<http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/explanation.asp> (2017年11月18日閲覧)
- 2 経済産業省 H.P 地域ストーリー作り研究会(第1回)事務局説明資料
http://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/chiiki/chiiki_story/pdf/001_03_00.pdf 参照。
- 3 文化庁 H.P「日本遺産 (Japan Heritage)」について
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/
- 4 地域における歴史事実への向き合い方については、例えば、京都府舞鶴市における引揚をめぐる地域認識のあり方から考えていくことができる(須賀、2017 参照)。
- 5 筆者は、かつて、歴史教育における実践論文として、会津戦争を取り上げたことがある(須賀、2006)。本稿は当稿を下敷きとしながら、さらに論考を重ねたものである。
- 6 当該視聴率は関東地区におけるビデオリサーチ社資料参照。
(https://www.videor.co.jp/tvrating/past_tvrating/drama/03/index.html (2017年11月18日閲覧))
同資料による NHK 大河ドラマのその前年の視聴率は、2012 年「平清盛」12.0%で、吉田松陰の妹を主人公とした、2015 年「花燃ゆ」と並んで、大河ドラマ中最下位の値となっている。全般に、大河ドラマの視聴率は

低落傾向にあることが指摘されているが、そうした中で、2014 年「軍師官兵衛」は 15.8%、2016 年「真田丸」は 16.6%を記録し、視聴率が低い傾向にあるとされる幕末を題材としたものでも、2010 年「龍馬伝」が 18.7%、2008 年「篤姫」は 24.5%であった。視聴率の観点から見れば、「八重の桜」「花燃ゆ」の低視聴率は顕著なものであったと捉えることができる。

- 7 会津若松市「平成 25 年会津若松市観光客入込みの概況について」会津若松市『平成 25 年 観光客入込数とその実態調査』参照。
<http://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/docs/2014041800039/> (2017 年 11 月 18 日閲覧)
- 8 中村忠司は、「大河ドラマ効果」について、「多くの観光客が放送年に訪れ、観光による経済波及効果も数百億円に達する」ことを挙げるとともに、大河ドラマの制作、放映が 1 年以上前に決定されることから、関連する地域において、次年度予算にプロモーション活動費を積算でき、受入のための態勢作りに時間を取ることができること、旅行会社の立場からも、旅行商品を企画しやすいことを言い、「活用しやすいコンテンツ」「(旅行商品企画の面で) ありがたいコンテンツ」であるとしている (中村、2014)。
- 9 2013 年 3 月から 5 月にかけて開催された江戸東京博物館「八重の桜」展のキャッチフレーズは、「逆境にこそ咲く花あり」であり、その展示案内は、「戊辰戦争の敗戦から立ち上がる人々の姿を通して、復興へのメッセージを伝えていく」と結ばれる (同展案内ちらし参照)。また同展図録における「エピソード」として 1928 年に、旧会津藩ゆかりの人々が一同に会した写真の解説文には、「六十年にものぼる苦難を乗り越えた会津の人々。その彼らをつないだのは、郷土を想う心、そして『絆』であった」と記され、当番組、及び同展が、戊辰戦争後の「復興」を東日本大震災後の対応につなげるオマージュであることを強く意識したものであったことをうかがわせるものとなっている (NHK、NHK プロモーション、2013)。
- 10 「八重の桜」エグゼクティブ・プロデューサー、内藤慎介も、2013 年 5 月開催の立命館大学における公開講座の中で、「ドラマの題材を決めていた 2 年前に、東日本大震災が起こった」「被災地に伺い皆さんと触れ合う中、今、東北に映像で何かできないかという思いが強くなっていき、大河ドラマ『八重の桜』が制作されることとなった」と語っている (大学コンソーシアム京都「NHK 講座」2014 年 5 月 25 日開催分)。
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/kouza/7_13/7_13.html (2017 年 11 月 18 日閲覧)。
- 11 例えば、薩長同盟等の場面でも坂本龍馬が登場人物として取り上げられていないことが話題となったし (第 15 話「薩長の密約」で、坂本龍馬は登場せず、薩長同盟について「土佐の脱藩浪士の暗躍で」とする語りのみが流された)、池田屋事件の回では、新撰組の無謀な強硬策を山本覚馬が詰問する場面もあった (第 10 話「池田屋事件」)。
- 12 全 50 話中、第 29 話「鶴ヶ城開城」まで、全体の 6 割は幕末会津藩をめぐる状況を描くものとなっていた。
- 13 NHK ドラマトピックス「八重の桜」
<http://www.nhk.or.jp/dramatopics-blog/2000/86512.html> ((2017 年 11 月 18 日閲覧)
- 14 番組制作者は、「『八重の桜』に登場する会津の人たちと、震災後、復興を目指して努力を続ける福島の人たちを重ね合わせていた」とし、講演の中で、「会津の人たちは誠実だ。そして歴史は誠実に生きようとした人たちを裏切っていない。死んでいった人たちの思いを背負い、自分だけではなく他人の人生をも生きるから、人は誠実になるのではないか」と語ったという (前注 10 に同じ)。
- 15 会津地域では、旧幕府軍の「東軍」に対して、新政府軍は一般に「西軍」と称される。
- 16 会津若松市では、礼儀や徳目を挙げる 6 つの行動規範とそれを締めくくる行動規範として「やってはならぬ やらねばならぬ ならぬことはならぬものです」とした文言を掲げた「青少年の心を育てる市民行動プラン“あいづっこ宣言”」が 2002 年に策定され、それをもとにした青少年健全育成施策が取られている。その根底となるものとして「教育に力を入れてきた歴史と伝統」をふまえた「会津で培われた規範意識」が挙げられ (会津若松市「あいづっこ宣言」の策定経過) <http://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/docs/2007080601651/>

(会津若松市サイト) 参照、2017年11月25日閲覧)、会津藩における子弟教育をテキストとしていることは明らかである。市内の小学校で1年生を対象に“あいづっこ宣言”を暗唱できた児童に合格証を授与するなど、当宣言は、学校教育において積極的な活用がなされている(「“あいづっこ宣言”の取り組み状況」<http://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/docs/2007082000056/>(会津若松市サイト) 参照、2017年11月25日閲覧)。当該施策について、価値観が多様化していく中で、地域に根ざす伝統的、地域的価値観(ただし武家社会に限定的なものであったことには留意が必要)をもとに一つの道徳的指針を公教育が提示することの意義は認められるべきだろう。一方で、既定の事柄に固執し、柔軟な発想を捨象する中で、政治的判断の過誤があり、その結果、多くの犠牲者を招来することとなった当地の歴史的事実についても、あわせて、提示することは必要だろう。

- 17 悲劇性を帯びた逸話を若い園児に提示することに対して、教員は相応の覚悟も必要であろうが、教員がそうした説明をすることもなく、園児たちは、ただ教員の指示のままに自刃の場を演ずることになる。そうした幼稚園での白虎隊演舞に初めて接した時、筆者は強い違和感をもったものだが、それについて地元で否定的な見解を聞くことはほとんどない。袴姿の我が子のりりしさに狂喜する母親と、その自刃の場をクライマックスとみて一心にシャッターを押す父親の姿がそこにあるだけである。論評でも、中村としが、「園児は先生の指示通りに踊るだろうが、それを見ている母親は、自分の腹を痛めた子どもが刀を振り自刃して倒れる様を見て、何とも感じないのだろうか」(中村、1993)と断ずるのが唯一の事例といってよい。
- 18 「幕末会津」のストーリー化という点では、長州藩の戦後処理に対する反発から、「長州憎し」とする会津若松市と山口県萩市との犬猿の仲が取りざたされることがあり、その和解の動きに対して、「アラブとイスラエルは2000年の恨みで戦っている」といった市民の声もあがり、その和解が頓挫したことが話題になったこともあった(1987年9月26日付『朝日新聞』朝刊)。しかし、そうした遺恨の元ともされた、新政府軍による会津藩側の遺体の埋葬不許可といった事態について、戦死した会津藩士のうち少なくとも567人が、藩の降伏から10日ほど後には埋葬され始めたとする史料が会津若松市で確認されたことが明らかとなったほか(2017年10月3日付『毎日新聞』地方版/福島)、新政府の軍事部門を統括していた長州藩の大村益次郎が、藩主松平容保の子息(のちの容大)誕生を容認し、「相当御手当」を施すことを方針としていたことが確認されたことは(岩下、2017(2015初出))、「幕末会津」におけるストーリー化のあり方に、改めて一石を投ずるものとなっている。
- 19 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局ほかは、エリアマネジメント活動の取組みの結果として、「弱体化してしまった地域コミュニティにおいて関係者の対話と協働をもたらし、まちの個性の構築、まちへの愛着と誇り(「シビックプライド」)の醸成、社会関係資本(「ソーシャルキャピタル」)の形成に役立つ」と述べている(内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局ほか、2016)。
- 20 文化施策に基づく「人間の安全保障」のあり方をもとに、「カルチュラル・セキュリティ」の概念形成を説く渡辺靖は、東日本大震災からの復興における「心の支え」としての文化の役割を強調し、「あるときは復興のシンボルとして、あるときは自己を取り結ぶ場として、そして、あるときは彼岸に寄り添う心の架け橋」となっていると述べている(渡辺、2015)。
- 21 当該観点をもとに考えれば、現在の教育施策としての「あいづっこ宣言」の誤謬は、明らかであるといえる。

[引用文献]

- ・新井敦史「芭蕉の訪ねる那須家の史跡」山本隆志編著『那須与一伝承の誕生』ミネルヴァ書房、2012年。
- ・伊藤香織「都市環境はいかにシビックプライドを高めるか」『都市計画論文集』52巻3号、2017年。
- ・岩下哲典「幕末籠城と懐妊・出産」『病とむきあう江戸時代』北樹出版、2017年(初出は、2015年)。
- ・ウィリアム＝ウィリス「会津戦争従軍記」中須賀哲郎訳『英国公使館員の維新戦争見聞記』校倉書房、1974年。

- ・ 会高剣舞会『白虎隊剣舞百年』1983年。
- ・ 菅野剛「『歴史への構え』を育む授業のあり方－白虎隊顕彰の意味を解釈する授業実践を例に－」中等社会科教育学会『中等社会科教育研究』33号、2015年。
- ・ 木村正昭「福島県の観光復興に向けて」労働政策研究・研修機構『ビジネス・レーバー・トレンド』2014年4月号。
- ・ 後藤康二「白虎隊テキストについての覚書1」『会津大学文化研究センター』8号、2002年。
- ・ 須賀忠芳「歴史教育における多様な歴史認識形成への視座－会津の『二つの敗戦』からみる地域・戦争・平和－」歴史人類学会『史境』52号、2006年。
- ・ 同「文化資源を活用した観光施策展開の意義とその課題－京都府舞鶴市を事例に－」日本国際観光学会『日本国際観光学会論文集』24号、2017年。
- ・ 田崎公司「会津戦争と地域編成－戊辰戦争・世直し一揆・直轄統治－」明治維新史学会編『明治維新の地域と民衆』吉川弘文館、1996年。
- ・ 田中悟『会津という神話－〈二つの戦後〉をめぐる〈死者の政治学〉－』ミネルヴァ書房、2010年。
- ・ 豊田武・高橋富雄ら『会津の歴史』講談社、1972年。
- ・ 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局・内閣府地方創生推進事務局「日本版 BID を含むエリアマネジメントの推進方策検討会（中間とりまとめ）」2016年。
- ・ 中村忠司「テレビドラマの舞台を訪ねる旅」増淵敏之・溝尾良隆ら『コンテンツツーリズム入門』古今書院、2014年。
- ・ 中村とし「会津は白虎隊を越えられるか」『会津の近代史を考える』会津若松近代史研究所、1993年。
- ・ 西村奏美ら「シビックプライドの種を市民の行動の中に見出す手法：都市生活に対する誇りと愛着を可視化する試み」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』60号、2013年。
- ・ 西村幸夫「観光まちづくりとは何か－まち自慢からはじまる地域マネジメント」西村編著『観光まちづくり』日本交通公社、2009年。
- ・ 早川喜代次『史実 会津白虎隊』新人物往来社、1976年。
- ・ リヒャルト＝ハイゼ『獨逸人の見たる会津白虎隊』結城司郎次訳、1941年。
- ・ 渡辺靖『〈文化〉を捉え直す――カルチュラル・セキュリティの発想』岩波新書、2015年。
- ・ D. マキャネル著、安村克己ら訳『ザ・ツーリスト－高度近代社会の構造分析－』学文社、2012年（Dean MacCannell, The Tourist: A New Theory of the Leisure Class, University of California Press, 1999）。
- ・ NHK、NHK プロモーション『2013年 NHK 大河ドラマ企画展 八重の桜』2013年。